

「近未来のアジア諸都市における

移動体・移動システムの予測」

Prediction of the movement system

in the Asia cities of the near future

研究代表者：阿部 栄一 (ABE Eiichi) 関西学院大学社会学部 特別研究員

共同研究者：前田 至剛 (Maeda Noritaka) 皇學館大学文学部 専任講師

要旨

今後いわゆる自動車社会が出現する新興国においては、グローバルに共通な課題、すなわちエネルギー問題をはじめとする資源問題、情報化の進展と先進国が実現した自動車社会構築が同時進行することになる。アジアの都市生活者の移動の価値感とその都市の移動システムは新たな移動社会(特に都市)の mobility にこれまでになく変化とニーズが生まれると考えられる。アジアにおける新しい移動社会を予測をすることが可能になれば、グローバルな諸問題の解決の糸口を見つけていくことができると考える。その変化予測を「低炭素社会における『人間の移動』と『移動価値』に関する文化社会学的研究」で示された2軸仮説を用いて行い、日本の社会との比較によってその変化を明らかにしたい。そのための手法開発および予備調査を今年度行い、それを用いて仮説を構築し、来年度に現地で行う実査に備え研究を実施する。

Summery

In the cities in Asia, it will be a common challenge to develop new society by using information technology under making the same infrastructure of advanced countries. Because in those cities, middle class people have lives in the same condition of the information technologies in advanced countries. This is a new social movement and unprecedented mobility in the city will make a feeling of movement of urban life not only in advanced countries but also in Asia. To predict the new mobile society in Asia will be able to find a clue to solving problems on a global scale for example global warming. By comparing that prediction with a two-axis hypothesis indicated by the "cultural sociological study on" move value in Japan, we would like to conduct a preliminary investigation and to carry out research for the inspections in Asia next year

1. 研究目的

本研究は東南アジア諸都市における近未来の移動体、移動システムを生活者の移動に関する価値観から探ろうとするものである。有史以来人は移動のための手段を、徒歩から馬などの動物利用、そして化石燃料を主とする自動車に代表される移動体を用いて、移動範囲を拡大し社会の発展を遂げてきた。しかし化石燃料の枯渇から代替燃料への転換を求められ、更に地球温暖化などの環境問題から低炭素社会への移行を迫られている。このような中で、今後新興国の都市では、これまで先進国がたどって来た移動社会の発展を追従するだけでなく、低炭素社会への将来を見据えた新たな移動社会の構築が求められている。このためには一般的に移動体、インフラといったハードウェアに関する研究が主流になると考えられるが、これまでの生活習慣の違い、気候風土の違いを重視し、実際にそれを使用するし移動する生活者側からの視点で新たな移動社会を構築することが求められと考える。本研究は新しい低炭素社会のあり方について、生活者の移動価値観をベースに検討を行うと同時にそのための研究手法開発することを目的とする。

2. 研究経過

本研究は2年間の予定で行う。初年度は仮説構築のための基礎的情報収集2年目は仮説立案から研究目標である近未来の移動システムの予測と研究手法開発を行う。

東南アジア諸都市の中から ASEAN 4 と呼ばれ、赤道に近く生活条件が先進国と大きく異なると考えられるバンコク、ジャカルタ、クアラルンプールの3都市を選んだ。

それぞれ固有の言語を持ち、多民族、多宗教などという条件のもとで、3都市に共通する移動価値観を仮説として見出すために日本語で書かれたWEBの中から、移動に関するキーワードを抽出した。この方法は学問的には偏りがある可能性が高いが、共通キーワードを簡便に早く見出すには適しており、検証作業を行うことによってその偏りを少なくすることとした。そして抽出された各都市のキーワードを比較のための参照軸を基準にマッピングし、各都市の特徴と共通点について検討した。この結果を日本のそれと比べることによって、来年度、近未来の移動体、移動システムに求められる要素についての仮説を構築するための考察を行った。キーワード抽出作業は、株式会社「マックスヴァルト研究所」に委託して行った。

3. 研究成果

3-1 3都市に共通するキーワード

「新たな中間層の増加」

3都市は広義の情報化社会である。先進国の都市と比較しても、情報装備に関しては遜色ないかそれ以上である。娯楽設備としてのTVの普及は今後も続くが、いわゆるスマホなどの情報機器は携帯電話の普及の延長線上にあり、Facebook、Twitterなどの利用は当たり前の状態で、それぞれの地域でアレンジして使用されているし、先進国の都市よりも早く普及する現象も起きている。また無線LANも確保されており、この観点から情報装備率は先進国並みであるし、結果として情報は先進国と同じ速さで共有化されている。この結果、経済学で用いられる人口ボーナスにつながる増

加を続ける中間層は、これまでの先進国の中間層とは異なり、情報に敏感な人が多い。これまでの先進国の中間層とは区別され、alt.elite と呼ばれる。人口ボーナスの役割を持ちつつ、同時に先進国の生活者と情報を共有する層である。一方生活インフラの整備などはこれからであり、ソフトウェアの構築も経験が少ない。今後の経済発展に伴って、生活インフラの整備は急速に進むと考えられるが、これらを使いこなすソフトについては、実態に即した新たなソフトの導入が期待される。例えば高度成長期にあるため、低炭素社会構築への関心は非常に小さくこれからであるが、先進国のスマートシティとは異なる新たな発想が期待できる。このようにこれからの3都市の発展は、先進国の中間層と異なる新たな特徴を持つ alt.elite の今後の動きが重要なキーと言える。本研究の主題である移動との関係は、広範囲の研究を必要とするが、生活者の移動価値観への影響は大きい。

(2) 地域性に起因すると考えられる生活スタイル

「2.1 移動に占める歩行の割合が低い」

短距離の移動でも歩行ではなく、他の移動手段を用いる傾向が強い。理由は2つ考えられ、1つは天候である。平均気温が30℃近くあり「暑い」。このことは移動にとって負荷が高くなり移動によるエネルギー消費が大きい。更にスコールなどの天候変化が激しく、移動の安心面から考えると、天候変化を考えた装備が必要になり、やはり移動負荷が大きい。このように移動することへの天候の影響は、物理的な影響以外に不快、不安と精神的な影響も大きい。他の1つは移動のための道路の未整備である。

人々が歩かないことと裏腹の関係にあって、整備が遅れているとも考えられるが、歩き難い、危ないなど移動しづらい。今後歩きやすい道路の整備が進むと考えられるが、歩行への物理的、精神的な抵抗はその効果が疑問視され、地域性を加味しようとする単なる道路整備ではすまない。このような移動負荷を考えた整備が必要になるが、温暖な気候に位置する先進国の未経験の面がある。基本的に歩くことの移動負荷が大きいということが大きな違いと推測される。このように地域性が歩くことの快適性、安心感などにネガティブな影響を与えている結果、経済的な面以外に自転車、バイクの普及が進んでいると考えられる。特にバイクは移動による生活者のエネルギー消費が少ないので今後も有力な移動手段であり続けると考えられる。

「2.2 外食の割合が多い」

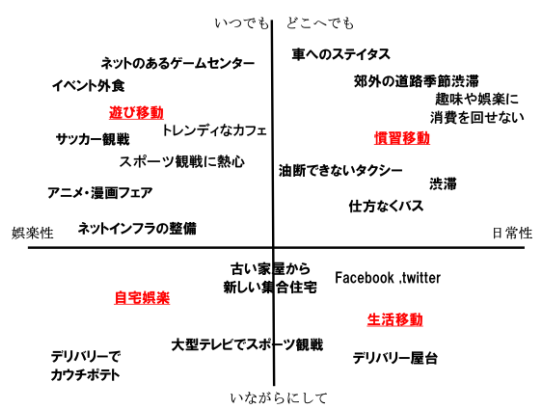
都市によって割合は異なるが、3食の平均50%近くが外食である。日本では考えにくい。この数値は国平均のものであるため、都市の特徴を表すものではないが、この背景には、外食だけに関わらず日本とは家庭内の役割分担の違いもある様である。そしてまた外食の持つ意味が、非日常的なものではなく、屋台などでのファーストフード的な食事を指すことにあると考えられる。最近では屋台から、デリバリーサービスによる家庭内での食事も行われてきていて、2.1に示す「歩かない」ことと、情報化が影響している可能性がある。また今後家電製品の普及が進むことによってもこの面での移動への影響も大きなものがあると考えられる。

「2.3 低炭素社会への関心が低い」

移動はエネルギー問題に大きく関係しているが未だ環境問題への関心は少ない。渋滞が社会問題になり始めているが、生活に直接影響を及ぼしていないことが、その要因と考えられる。

3-2 ポジショニング結果

得られたキーワード（3都市すべて）を用いてポジショニングを行った結果を示す。得られた軸は縦軸が移動の負荷（移動する、しない）、横軸が移動の意味である。



ポジショニング

この2軸で構成される4つの象限は、右上の象限を慣習移動、右下の象限を生活移動（自宅内移動）、左上の象限を遊び移動、左下の象限を自宅娯楽と考える。この2軸は、日本における移動のポジショニングとほぼ同一である（違いは横軸の左が娯楽性から趣味性に変わっている）が、これは生活者の移動が、基本的に生活をする上で必要な移動と（右側）生活者の意志による移動（左側）とその移動に関わる負荷（上に行くほど大きい）で分類できるからと考える。

4. 考察（今後の課題と発展）

3. から近未来の移動体についての仮説を構築するために、重要と考えられる事項に

ついていくつかの考察を行った。

（1）情報の同時性の影響が大きい

移動体の代表である車の普及は経済的な理由から始まったばかりであるが、生活者は先進国の車の情報を既に持っている。どんな技術があるのか、それがどのように使われているかの知識は十分に持っている。今後インフラを構築していく上で、どんな移動体が可能なのか、そしてそれをどう使いこなすのかを考えるのは先進国と同じ条件にある。これらのことから、今後ポジショニングの縦軸の上部の新たな発展が考えられると同時に横軸の左が娯楽性から趣味性まで広がると考えられる。

（2）気候の影響を受けにくくなる

近い将来、家電の普及、情報技術の進歩は「歩かない」を大きく助長すると考えられる。歩く必要が無くなり、気候変動の影響も不安も減少するからである。すなわちポジショニングの慣習移動、遊び移動が減って、生活移動、自宅娯楽が増加すると予想される。移動が少なく、かつ生活レベルの向上につながることは、快適な移動の割合が増加することになると予想される。

（3）新たな移動の楽しみの実現

移動時の天候の不安、不快の減少は、移動による楽しみの増加につながり、新たな移動の実現が予想される。特に情報技術を用いた移動体同士のシームレスなつながりは、移動目的を安心して快適な達成につながるし、移動そのものの楽しみを増幅すると考えられる。

参考文献

「続・発想法」 川喜多二郎 中公新書
「質的データ分析法」 佐藤郁哉 新曜社